



## 親父の死に様

松 本 毅

親父が死んだ。10月4日、76歳だった。昨年の膵臓ガンの摘出後、今年肝臓への転移が見つかった。再入院をして2週間ほどで逝ってしまった。家族で駆けつけた時にはもう白木の棺桶に眠っていた。そこには紛れもなく見慣れた親父の顔があるのだが、その肉体には既に魂は宿っていない。亡き骸とはよく言ったものだ。次男が少し泣いた。私は涙が出なかった。通夜は少し仮眠をとった後、朝まで起きていた。みんな寝静まり、場違いに煌々と照らされた祭壇の前で何度も何度も棺桶のふたを開けて見る。が親父は決して目を覚ますことはなく、少し歯を覗かせた口は決して語ることはなかった。通夜は残されたものが故人の死を認識する時間であることを知った。

亡くなる前日、親父が母親に「自分が死ぬ夢を見た。」といい、「命、もうおしまい。」「早く死にたい。」と言った。母親には、充分自分の人生に満足している、ちっとも死ぬことを恐れている風には見えなかったという。「よっぽど死ぬ夢がいい夢だったのだから、ど

んな夢だったのか聞いておけば良かった。」と笑いながら話してくれた。遺品を整理していて商科大学の卒業アルバムがあった。終戦間際の時期でもあり、士気盛んな言葉の中にも少し陰りのある言葉が目立っていたが、父のそれはまったく違う言葉で、父の生き方そのものが書かれていた。

「私は英雄になりたいとは思わない。凡人でありたい。ただし、非凡な凡人でありたい。」

決して裕福ではない家庭に生まれ、尋常小学校を出て就職と思っているところに先生から成績が優秀だから大学にいきなさいと薦められ商科大学に入った。大学出だからすぐに戦地へとは送られず、士官学校で終戦を向かえた。戦後の混乱期の中で銀行員となり、母親と結婚した。戦後の復興から高度経済成長という激動の日本経済を銀行員として支え続けた。そんな父親の背中を見つめて私は育った。我が家には大きな波風も立たず、淡々と生活が営まれていたように私には見えた。ただ平凡な家庭であると思っていた。

しかし私は父のこの言葉を読んだとき、初めてその非凡さに気付いた。愚痴も言わず忍耐強く銀行員を勤め上げ、戦後の激動の昭和を動かした英雄を気取るわけでもなく、人を困らせるような正義感もなく、マイペースで確実に自分の人生をエンジョイし、全うした。学生時代に思い願った非凡な凡人をここまで徹底して貫き通した親父の人生に死んでからその価値観の大きさに気づかされた。母親は「あんなええお父さんは他にはおらんわ」と亡くなってから口癖のようにつぶやいた。これこそ非凡な凡人である。

葬式も終わり、棺を載せた台車を押して式場の外に出るとなんととも底抜けに明るい真っ青な秋空が広がっていた。見送る人を悲しませないようこんないい天気の中で見送らせてくれるとは、なんて親父らしい葬式だろう。煙突もない近代的な火葬場でいよいよ亡き骸もこの世から消えてしまう時、さすがに涙を流した。そして私も親父のように死にたいと強く思った。

# フナムシ

## ちょっと気になる海辺の生活者

藤村 早苗

### 《ちょっと気になるその訳》

皆さんは「フナムシ」という虫をご存知だろうか。海辺を歩いていると一見「ダンゴムシ？」と思うのだが、ダンゴムシより扁平で色は薄く、テトラポットに群れてくっついてある小さな虫。気にはなるけれど見れば見るほど鳥肌が立つ。特に動き出すと私はもう駄目だ。フナムシについてインターネットなどで調べてみると大抵イメージは悪く「気持ち悪い」とか「海のゴキブリ」など様々。

カヤックで安房川を進んでいると岩場にじっと張り付き、近づくとワサワサッと音を立てて一目散に岩影へ身を隠す。中には慌てすぎて川に落ちる奴もいる。臆病者で、人間にはあまり害は無いはずのフナムシ。どうしてこんなに嫌われ者なのだろう？

### 《フナムシ捕獲！？》

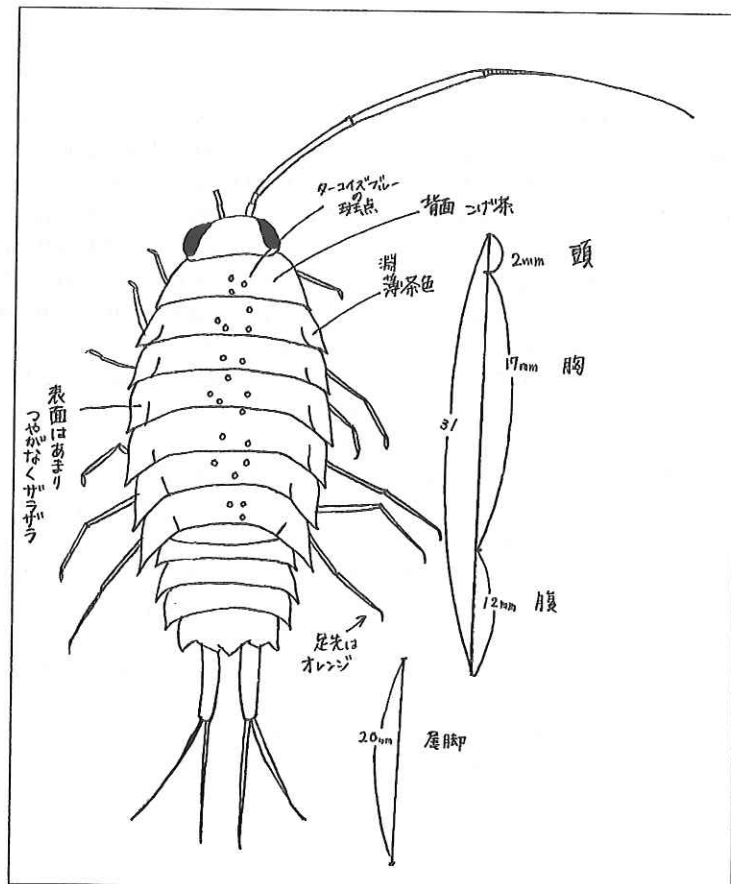
「フナムシ」は節足動物門甲殻亜門軟甲綱等脚目に属する。つまり、エビやカニの仲間。彼らとはよく海辺で出会うが、彼らの住処は潮間帯、満潮時は海になり干潮時には陸上になる、そういったところで生活している。11月某日、安房川ではめっきり姿を消してしまったフナムシを求めて宮之浦の浜へ出向いた。最初、浜辺にフナムシの気配は無かった。何気に大きな流木を動かしてみると急にワッと姿を現してきたので、一瞬鳥肌が立つ。しかし、虫網とプラスチック容器を硬く握り締

め再チャレンジ。大きめの漂流物の下に狙いを定め、一気にごろりと動かす。ワッと出てきてクモの子を散らすようにパッと姿を隠す彼らを必死でプラスチック容器で捕まえる。ゴロゴロの玉砂利のこの浜ではなかなか捕まえられず悪戦苦闘、フナムシとの追いかっけが続く。すると岩の間で身動きが取れなくなり固まっているフナムシを発見。そっとプラスチック容器を近づけ、フナムシを追い込んだ。そのフナムシは大きく立派で、捕まえたときは背中中央付近が深いこげ茶色で周りには薄茶色、ターコイズブルーの斑点が背中中央部に散っていた。

事務所に帰って眺めて見るとかなり元気が無く弱っており、しばらくすると死んでしまった。私の捕獲が下手だったために命を落としてしまったフナムシ。彼の死を無駄にしないようにじっくり彼の体を観察させてもらうことにした。

### 《フナムシの体》

フナムシの体は頭・胸・腹に別れ、頭には長い触角を持ち、胸と腹には鎧のように分かれる「体節」がある。胸は7つの体節にわかれ、それぞれに1対ずつ合計14本の「胸脚」がある。フナムシはこの胸脚の14本の脚をたくみに動かして歩く。腹には5対の「腹脚」を持つがこれは軟





らしく葉状で呼吸に利用されているらしい。そして後ろに1対で先が2つに分かれている「尾脚」がある。

フナムシを眺めていて印象的だったのは大きな黒い眼であった。あの大きな眼には何が映っていたのか。彼らの目は複眼で約700個の眼からなるらしい。私は早速、眼を観察すべく実態顕微鏡を持ち出してセットした…まではよいが、いざ覗こうとすると躊躇した。この中を覗きたいが、あまりにショックな映像だったらどうしよう…。一息ついて腹をくくって、そっと実態顕微鏡を覗いてみた。するとそこに写っていたものは完璧に整ったフナムシの複眼だった。きれいにピシッと六角形の複眼が並んでおり、表面はカーボンで加工されているかのように滑らかで、あの大きな黒い眼すべてを覆っていた。頭にはターコイズブルーの斑点が中央に点在し、それはさながら「風の谷のナウシカ」に登場するオームのようだった。

私はフナムシの乗ったプレートをそっと動かし、今度は背中に視点を移した。体節の表面は小さなボコ

ボコに覆われ、淵はトゲトゲ。肉眼では深いこげ茶色の背中も、顕微鏡の中では無数に並ぶ黒い星で覆われていた。彼らは体の表面に色素胞を持っており、この中の色素粒を収縮あるいは拡散し体の色を変える。死んでしまったフナムシの色素粒は拡散し、星のような形で体の表面を覆っていた。

フナムシを裏返し裏側を覗くと胸にはいくつもの脚が並ぶ。脚にも黒い星が並び、エビやカニのようなスネ毛があった。足先はオレンジ色で2つに分かれている。腹には軟らかく薄いうろこのような腹脚が並ぶ。その真ん中に小さな足が2つ出ている。その先は丸くマッチ棒のようで、腹脚と同じ色で薄く透けている。図鑑で調べると「雄の生殖突起は左右に分離し、第2腹肢のみが交尾器になる」とのこと。つまり、このフナムシは男の子だったのだ。ちなみにフナムシの女の子はお腹に「育房」があり、お母さんになると約80個もの卵をここに抱く。そして孵化した子供は体長4mm程度になるまでこのお母さんの育房で育

つ。なんとという過保護ぶり。

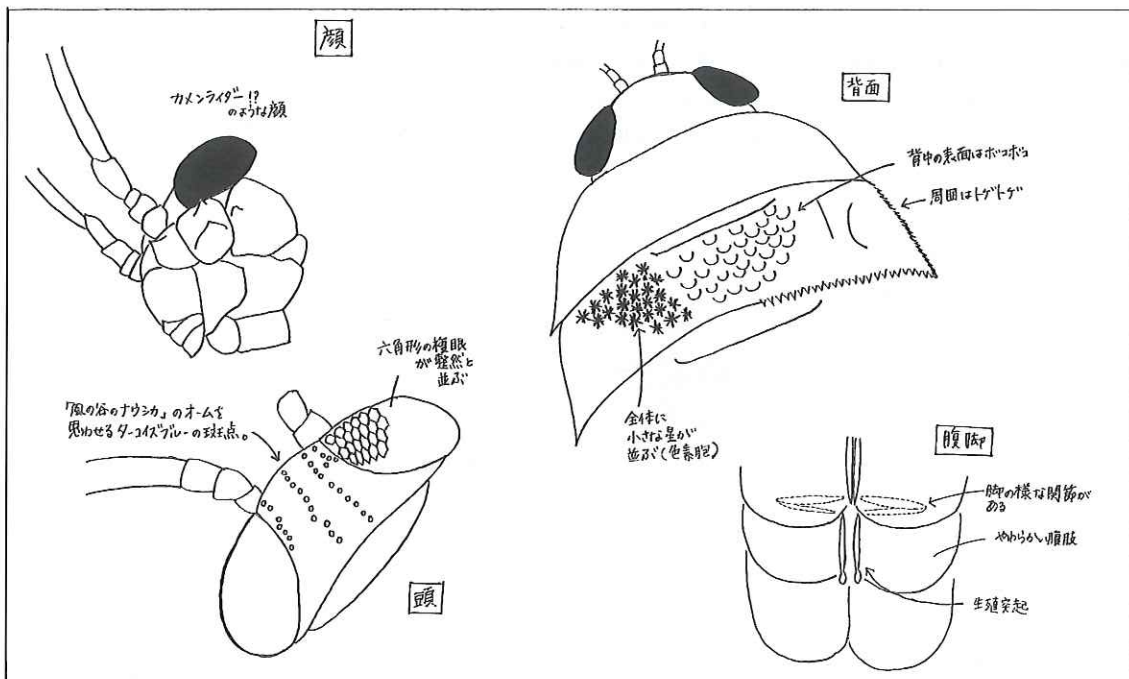
### 《フナムシの理想と現実》

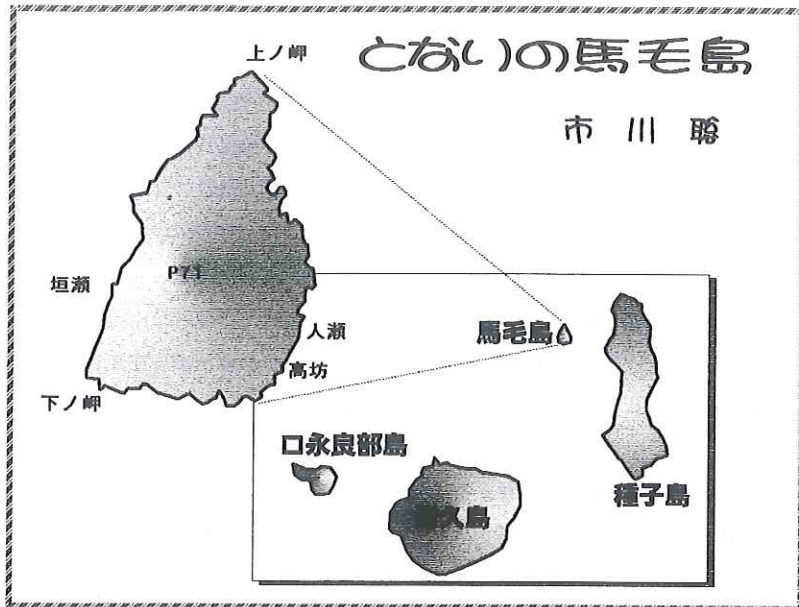
実態顕微鏡の幻想的な映像から眼を放し、改めて自分の肉眼でフナムシを見ると、やはりフナムシはフナムシだった。フナムシの視点から見たフナムシの体は実に感動的で美しいものだったが、人間の視点から見ると小指サイズの小さな黒い虫だった。

それはきっと、フナムシの視点にはフナムシの美しさがあり、我々人間の視点には我々の美しさがあるということなのだろう。その間にはあまりに大きなずれがあり、我々人間は我々の価値観でフナムシを評価し、そして「気持ち悪い」と嫌ってしまう。仕方の無いことだが、我々はどれだけのものを「気持ち悪い」と言って遠ざけているのだろう。こんな美しい世界を知らずに。

### 参考文献：

1. 「カニは横に歩くとに限らない」  
武田正倫著 PHP出版 1992年
2. 「原色検索日本海岸動物図鑑Ⅱ」  
西村三郎編 保育社 1995年





### はじめに

2001年4月16日から19日、マゲシカの角を拾うため、シーカヤックで馬毛島に渡った。前号（YNAC 通信 13号）ではその調査報告として、マゲシカの角を基に、ヤクシカの角の特徴を描き出したが、今回は、馬毛島そのものについて報告したい。

### 馬毛島とは

馬毛島は、屋久島と種子島の間、というよりもむしろ種子島の北部西岸に浮かぶ、周囲約12kmの無人島である。種子島の能野（よきの）集落から最も近く、直線距離で10km ちょっと、シーカヤックで渡るにはちょうどよい距離であった。

大部分が標高20~30mの平坦な地形で、島の中央やや南よりある71mのピークが最高峰となり、ここへ登れば島がほぼ見渡せしてしまう。

馬毛島は、戦後、開拓団の入植により500人規模の集落が築かれるなど一時的に生活が営まれているが、平坦な地形故の暴風に翻弄され、1980年には再び無人島となっている。

近年は企業により多くの土地が買収されており、使用済み核燃料の中間貯蔵施設の誘致話や産業廃棄物がらみ？の採石等で揺れているところである。

### シーカヤック

今回は岡田愛とタンデム艇に乗って馬毛島へ渡った。海は驚くほど穏やかで、西日に向かって緩やかに飛行する

トビウオが、実に優雅なゆったりとした時間を演出してくれた。途中、大きな流れ藻の下に群れる小魚たちを眺めたりしながらゆったりと漕いで、約1時間45分程度で人瀬に到着。上陸ポイントを探したが、屋久島同様岩礁には上陸適地がなく、南部の高坊の港を目指した。港の奥は緩やかな岩と小砂利の浜となっており、無事上陸に成功。近くに小川もあったので、この港にベースキャンプを設けた。

その後2日間、風が強くなり4mの高波となり帰りが危ぶまれたが、4日目の朝、ようやく風が収まり、再び種子島へ漕ぎ戻る。昨日までの様子からまだ相当波が残っている事を覚悟したが、意外なほど海は静まっており、追い風を受けて1時間20分ほどで能野港へ戻った。屋久島では風が収まってもいやなうねりや潮流があり、あまりベタ凧になることがないのだが、こちらでは風

がなくなれば基本的に海は穏やかという感じであった。黒潮本流からやや離れている事とともに、種子島という万里の堤防の存在が大きいのかも知れない。

### ダツと海亀

無人島なら食料は現地調達でしょう！ということで馬毛島へは必要最小限の食料で渡った。釣りやイソモン取りでタンパク質は確保できると踏んでいたのだ。到着してすぐ、高坊の港でダツが釣れた。幸先良しだ。しかしイソモンは意外なほど少なく、頼りにしていたジンガサもさっぱり見つからない。案外、能野の人たちがまめにイソモン取りに来ているのかも知れない。

翌日もダツが釣れ、カメノテ、ツブなどで食いつなく。しかし3日目、風が強くなり海が大荒れとなってしまった。港の奥でしか釣りができない。それでもダツぐらいは釣れるだろうと思って港へ行ったら、なんとウミガメが避難してきていて、港の中をうろうろと泳いでいる。釣りははじめても一向に出ていかない。そのせいかこの日はダツの姿も見えず、あえなく敗退。海岸もイソモン取りどころではなく、寂しい夕食となった。

馬毛島沿岸は、人瀬から高坊まで漕いただけであったが、その間だけでも多くのウミガメを目撃した。屋久島沿岸より明らかに密度が高いようだ。まだ産卵シーズンには早かったが、この時期馬毛島沿岸で、栄養を蓄えているのかも知れない。

イワタイゲキに囲まれた高坊港のベースキャンプ





## 究極のシカ植生

今回歩いたのは島の南半分だけだが、馬毛島の植生は屋久島のすぐ近くにあるながら、全く異質のものであった。海岸を一面覆い尽くすイワタイゲキの群落。背後にはモクタチバナとオオハマボウの海岸林。そこそこにソテツが茂っている。内陸は6割が草原だが、大きくシバ草地とワラビ草地に二分でき、ワラビ草地にはハスノハカズラが巻き付いている。ほんの少しの照葉樹林の他に、モクマオウの植林地が71mピークを取り巻いている。恐るべき単純な植生だ。

内陸部はともかく、海浜植物は海流に乗って運ばれる広分布植物が多く、どこの海岸も似たような海浜植生となる場合が多いが、ここではイワタイゲキ一色である。他の植物の種が漂着しないと考えるよりは、イワタイゲキ以外のものは全てシカに食われてしまったと考えるのが妥当なようだ。

ここではとにかくシカにばりばりに刈り込まれた植物を見るが多い。海岸のグミやハマヒサカキは垣根のツツジのように刈り込まれ、ちょっと見には何の木かわからないぐらいだ。また驚いたのはコシダが直径6mほどの丸く盛り上がったマウンドを作っていた事だ。周囲から刈り込んでくるシカに対抗するため、がっちりスクラムを組んで密生し、中央にシカの侵入できない藪を作って生きながらえているのだ。ハマヒサカキにしてもコシダにしてもヤクシカに好んで食べられているとはとうてい考えられない植物である。彼らが姿を変えて必死に防衛体制をとっていることが、ここでの過酷なシカ食庄を物語っているのである。森林の屋久島と草原の馬毛島を単純に比較はできないが、屋久島でも、もしシカが増えて、行き着くところまで行ってしまうたら、最後に残るのは上記の植物達なのだろう。

## 逃げるシカない

馬毛島はシカの島で、草原に群をなして草をはむマゲシカをそここで見ることができる。しかし出会ったときの反応がヤクシカとはまるっきり違う。

屋久島では、森でヤクシカに出会うとまずピヤツと鳴かれる。警戒音である。そもそもこの声を聞いて、シカを発見することも多い。その後もしばらくこちらを見ながらピヤツ、ピヤツと鳴き続け、まるであっち行けと言われていているような気がしてくる。逃げる場合も、ダダッと少し走っては立ち止まり、こちらの様子をうかがってからまた逃げるという感じで、一気に走って逃げ去ることは少ない。

ところが馬毛島では様子が違う。まずマゲシカは人を見ると声も立てずに一目散に走り去る。遠くまで走ってからようやく立ち止まり、おもむろにピヤツと鳴き始める。

今はあちこちに狩猟禁止の看板が立つ馬毛島だが、かつては種子島家の御猟場に指定されるなど古くより鹿撃ちのフィールドであった。1955年から20年間は鳥獣保護区に指定されていたが、1986年に再び鳥獣保護区に指定されるまでの空白の10年間は野放し状態であったようで、山口組の幹部がマシンガンの試し撃ちのために、マゲシカを標的にしたとかしないとかいわれるほど過酷な狩猟が行われたようである。見通しのよい平原に棲むマゲシカはまさに逃げるシカない生活を送ってきたのだ。その点、森に守られたヤクシカはまだ幸せなのかもしれない。

## 遺跡群

馬毛島は種子島から近いということもあり、様々な人の痕跡が残されている。弥生時代など古い遺跡もあるようだが、なんとといっても目に付くのは、高坊の港の背後に並ぶ石垣群だ。数メートルの幅で何層にも築かれた石垣は、トビウオ漁の漁期に利用した小屋跡ということだが、その姿は、海賊から港を

守る岩のようである。

岩といえば71m峰の山頂には、第2次大戦のトーチカが残されている。こんな丸見えの所にこもって、いったい何を守っていたのだろうか？暗いトーチカの中には見張りの当番表らしきものが生々しく書き残してあった。

## おわりに

3日目の午後、島の西側の垣瀬と呼ばれる海岸へ行った。緩やかな芝生の丘の上からは、南に屋久島、口永良部島、正面に硫黄島、竹島、北西に開聞岳、佐多岬を望む大パノラマが広がっている。ハマヒサカキのすさまじいばかりの風衝樹形は、猛烈な季節風を予想させるが、春の暖かな風を受けて、夕陽を見ながらビールを飲めば、最高だろうなと思った（残念ながら、この日はもうビールは尽きていたのだが…）。

様々な思惑に翻弄される無人島だが、誰の物でもない時間と空間の中にこそ至福が存在すると昼寝をしながら感じた垣瀬であった。



シカに刈り込まれたコシダのマウンド



高坊の石垣



垣瀬/夕陽の丘で昼寝をする岡田愛。まわりを風衝ハマヒサカキが囲む。



## 栗生塚崎ダイビングコースガイド

浜崎宏美



表通りのきらびやかなサンゴ群落

### #1「栗生って？」

屋久島南西部の栗生は、宮之浦からは車で約1時間の位置にある。北東及び東の風が島に吹きつける日には、栗生は風の衰となるため穏やかな海況となる。

栗生周辺は南からの黒潮が直接ぶつかっているため、屋久島の中でも特異な海域となっている。この暖流の影響により造礁性サンゴの発達が著しく、そこに黒潮に乗って運ばれてきた、熱帯系の生物が多く生息している。また潮通しが良く、ツムブリやウメイロモドキなどの回遊魚の群舞も見られる。

今回は、ダイナミックかつ多彩な栗生のダイビングポイントを紹介する。

### #2「栗生コースガイド」

#### ①車道終点

栗生青少年旅行村のコテージ群を抜け、「黒潮とせせらぎの里」の大きな看板があるT字路を右へおりたところで車は終点。ハマユウやスナズルが広がる白い砂浜からエントリーポイントを目指す。正面沖合いの瀬までは離水サンゴ礁の上を歩いていく。滑りやすいので注意。引き潮ならばタイドプールに取り残された生き物達を観察するのも楽しい。

#### ②ENTRY & EXITポイント

2つの突き出た岩の目の前でエントリー。すぐ真下に北北西へ向けた水路が走っている。水路手前の浅場ではモンツキハギやブダイの仲間、ツノダシやベラの仲間などが大群で行き交う。水面近くでイズミの群れがプランクトンを夢中で食らう様が圧巻だ。ここからしばらくは水路に沿って進む。

#### ③水路両岸の壁

水路両岸の壁にはキホシズメダイやオヤビッチャなどのスズメダイの仲間やニザダイの仲間が何百匹と群れている。また、チョウチョウウオの仲間やキンチャクダイの仲間、ベラの仲間など多くの種類で溢れかえっておりとても賑やかだ。時にアオリイカやギンガメアジの幼魚、キビナゴなどもやって来る。エントリーすぐの左壁にはおそらく栗生で今、一番気の強いクマノミのペアが生活している。

#### ④水路沿いの砂地

砂地のあちこちでテッポウエビの巣穴にクビアカハゼが居候しているのを見かける。テッポウエビは、せっせと巣穴を掘ってハゼに巣を提供しているが、ハゼは穴の入口で目の悪いテッポウエビの代わりに見張りの役割をしているらしい。砂地に掘られた彼らの巣穴には、まるで迷路の様にいくつもの出口がある。一旦、穴の中に逃げ込まれると次はどの穴から顔を覗かせるか解からない…

#### ⑤水路沿い3つ目の広場

いつ来てもほしいこの場所でフタスジタマガシラの群れがポーとしている…ようにしか見えない。が、これが彼らの生活スタイル。

#### ⑥広場

大きな砂地が広がって視界が開ける。水面から見ると沖には人間の手の様な水路が何本も走っている。

#### ⑦ギャラリー

広場の西側には我々がギャラリーと呼んでいる大きな根が突き出している。

この根にはまるで赤い花びらが舞う様にキングヨハナダイ等がついている。この根でじっとしているといろんな種類の魚が次々と行き交うところからギャラリーと名前がついた。また、秋から冬にかけてはウメイロモドキの大群がどこからともなくドワア〜とやって来て来訪者（我らダイバー）を「なんだなんだ？」と好奇心一杯な面持ち？で取り囲む。その様はまさに「青の壁」！一度一人で潜った時にこの壁に360度囲まれて本気で食われるかと思った。ああ、幸せ（笑）。

#### ⑧洞窟

広場の手前の西側岩礁に洞窟があり、洞窟をくぐるとL字に曲がり細い割れ目が続いている。洞窟内暗闇の岩の隙間でうごめくのはサラサエビ達だ。天井や左右の壁から小さな体をンパッと広げているイソバナをはたいて折らない様にしましょう。割れ目を抜けると表通りになる。

#### ⑨表通り

ギャラリーから南に伸びる水路をゆく。その一段上の浅場一



体にはミドリイシを主体としたさんご礁が広がる。通称表通り。陽光が降り注ぎすべてが光輝く様は、まさに華々しいブロードウェイのような表世界だ。南にたゆたいながらエントリー口へ戻る。

⑩裏通り

広場から（沖を向いて）右の水路沿いに曲がると通称裏通りとなる。裏通りの名の通り、この狭い水路沿いはあちこちにハングした大岩が突き出している。その奥の暗闇ではこれまた様々な生き物が身を潜めつつ生活している。私的には歌舞伎町のようなこの怪しい雰囲気が好きだ。

⑪吹き溜まり

砂地に溜まった木切れやカイメンの中に結構立派なサイズのツマジロオコゼが隠れていることがある。体が枯葉そっくりで見つけるのはちょっと難しい。多い時は5～6匹、同じ吹き溜まりに溜まっている。

⑫大岩のハングした場所

岩の下、穴の奥底からヒョロヒョロと長い吻を伸ばしている生き物がいる。吻に触れるとシュルル〜と穴へと引っ込んでゆく。円筒形の体幹とその前端におよそ1～2mはあろうかという長〜い吻を持つ。そんな生活故、私はその潜む体を実際に見たことが無い。彼らはユムシの仲間です。

⑬裏通り終点

裏通り出口付近は行き止まりとなっている。壁沿いを見上げると何百というミナミハタンポやアカマツカサがザワザワうごめいている。この中を押し通ると視界がパッと開け表世界へと帰還できる。

⑭なんちゃってCAVE

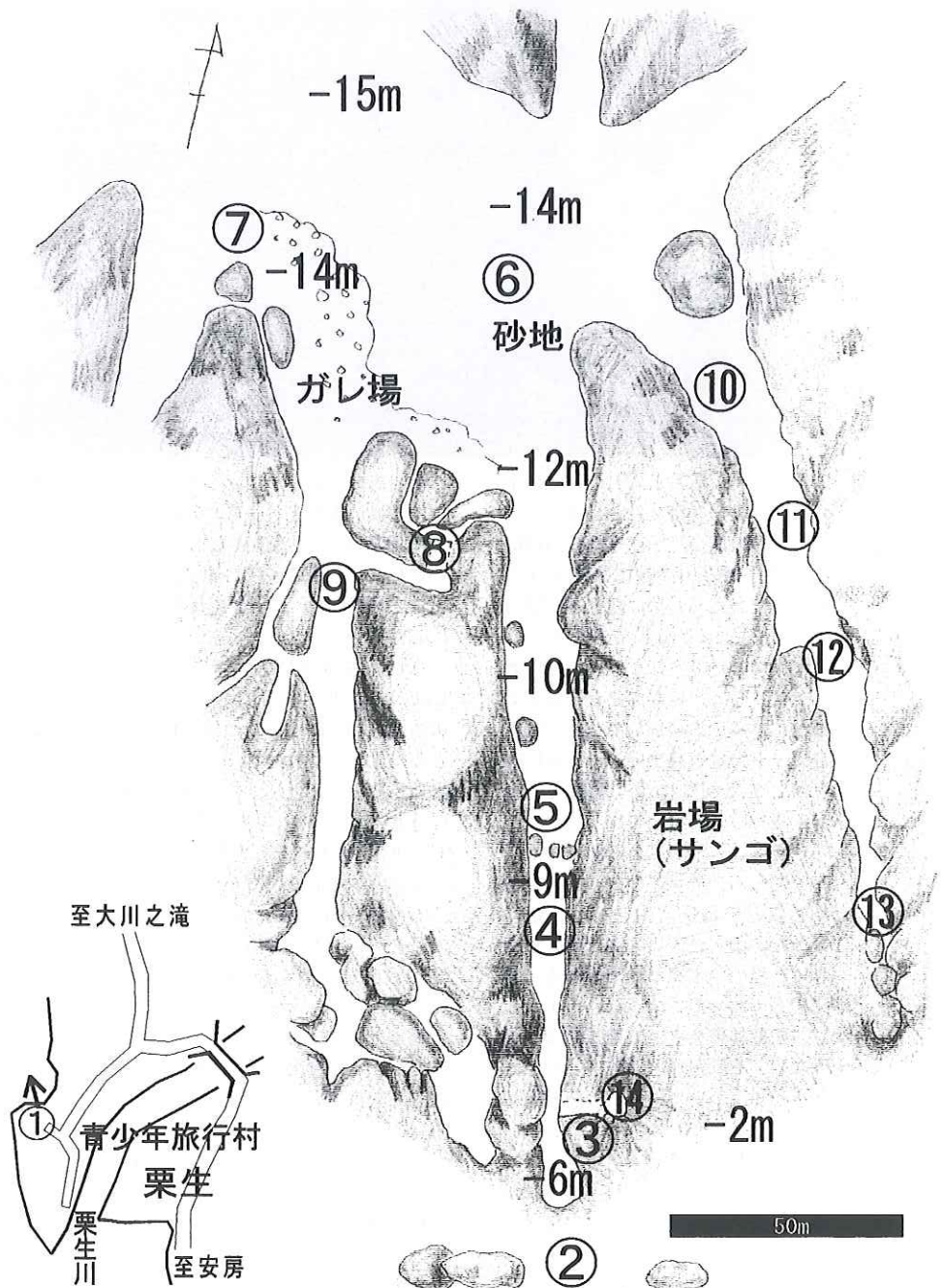
素潜りでも通過可能なミニ洞窟。水深8m位。一人がやっと通れる位の大きさ。

#3「終わりに・・・」

栗生はとにかく生き物の種数もその個体数も多い海なので年中賑やかな海中世界を堪能することができる。如何せん目移りしてしまいがちだが、水面から海の底、穴の隙間までいろいろな所に視線をやりその生き様をじっくりと観察していただきたい。また、数が多いにも関わらず、それぞれがちゃんと住み分けているのがとても面白いところだとも思う。まだまだ知られていない事がたくさん発見できそうな、そんな興味深く、かつ貴重な場所だ。



洞窟





# 西部林道の樹木

～山の神祭りの清掃学習会にて～

小原比呂志



アコウ

旧の正月と五月と九月、各月の十六日は『山の神祭り』ときまっている。国内の広い範囲で旧来この日は山仕事を慎み山の神に感謝をささげる日だったらしい。屋久島に限らず古いことはどんどん消えて行くご時勢でもあり、こういう行事に賛同(?)して、様々なことを考える機会にするのもいいのではと、屋久島ガイド連絡協議会では、会員に呼びかけて毎回なにか有意義なイベントを行うことにしている。

今年は11月1日が旧暦九月十六日にあたるので、この日に屋久島のあちこちで清掃活動を行うことになった。山・森・川・海と班に分かれて、担当の理事が計画を練る。森班担当の菅文雄・小原比呂志チームは、西部林道を歩いて周辺のゴミを回収し、それだけでは面白くないだろうから、ついでに周辺の照葉樹林の樹木チェックリストを作る、という案をだし、希望者を募った。

当日、集合地ヒズクシ下に現れたのは、菅文雄、伊藤仁久、古川玲子、青木高志、加地英史、持原道子、井坪美紀、武田昌行、伊藤千賀子、小

原比呂志の10名。フィールドワークには良い人数だ。一応、万吉谷から川原南谷まで道路周辺のゴミ拾いをしながら進み、所々面白そうなところで樹木チェックをすることにした。

「あんまり凄いのには気づかないようにしよう」と誓い合っていたのも束の間、ブツを見つけてしまうどうしても拾いたくなる習性である。ふと見ると加地くんがはるか谷底に下りて捻じ曲がったガードレールを掘り出そうとしている。

「やめろ～!」と叫びかけた私の後ろを菅さんがすたすたと通り過ぎて行き、ガード下のガレ場に向けおりて散乱する雑誌の山をかき集め始める。

結局ゴミ袋にして20ほど集まったが、ポイ捨て系のものは少なく、ほとんどは不法投棄系で、県道・国有林等の行政系にも目立つものがあつた。特に県道工事の法面吹付けに使ったらしい堆肥製品の袋が大量に回収された。

この日、万吉谷から川原南谷まで

2kmほどの道のりをぶらぶらしたただけで、実に80種の樹木をチェックすることができた。林道から海岸までの間で以前に観察されているものをこれに合わせると、西部林道周辺の樹木リストは102種になった。もう少し増えるはずだが、これはなかなかの数である。最近出版される植物図鑑に屋久島で撮影された写真が多いのも、ひと取材あたりの歩留まりが多いからかもしれない。

林道を歩いてみて受ける印象は、「バイオニア植物の宝庫」ということだ。

約10kmのなかに海岸から標高280m(万吉谷)までという高度差があり、尾根あり谷あり、峡谷、急斜面、緩斜面、山腹岩壁、海岸岩壁、巨大転石地帯と様々な地形がある。いくらか残る原生林以外は、ほとんど段々畑跡、炭焼き跡、人工林、崩壊地、林道ギャップ、台風ギャップ、など人間の干渉か自然の攪乱が加わったところで、環境条件はいろいろ変化に富んでおり、それぞれの



立地に適材適所で様々なパイオニア植物が入り込んでいることが、西部照葉樹林をより多様な生態系にしているように見える。

少し林内に入ると、木々の姿の異様さに驚かされる。地中に隠れているはずの根がむき出しになって見えているのだ。アコウやガジュマルの網状根や気根、ホルトノキの板根は当然としても、オナガカエデやフカノキ、ハゼノキにマテバシイまで岩の上にそのまま乗っかったかのようにいる。いくら雨が多い屋久島といっても、岩の上に木が直接着生できるはずはない。おそらくかつては白谷のように、岩々が蘚苔類と腐植土の着生植物床に包まれている

ような状況があったのだろう。森が切り開かれることによってさまざまな木の着生が促進されたが、同時に着生植物床の乾燥と剥離が進み、木は育ったものの、根を包んでくれていた着生マットは消えてしまった、といったところだろうか。

しんとおさまりかえった素晴らしい原生林、というのでない、様々な遷移中の状況をつつみこんで、全体としておおいに多様な自然が動きつつけている、という姿がやはり屋久島らしい。崩れ落ち続ける山肌に這い上がり這い上がる、「走り続ける生態系」である。

今年は木の実の成り年で、ヤクシマオナガカエデの種子が袋から手

づかみで撒いたように落ちている。ウラジロガシとマテバシイの膨大な量のドングリは、選果場状態で路上にたまっている。マメガキやシマサルナシ（小さいキウイフルーツ）もバラバラ落ちているし、シロダモやクスノキなどアボガド系の実も枝にたわわ、海岸のハマヒサカキやシャリンバイ、シャシャンボ（小さなブルーベリー）も食べ放題だ。ヤクザルもヒヨドリも意欲的に種子を運んでくれるに違いない。これらの膨大な種子が、森の「動き」の基礎になる。生態系の活力、植物の増えようとする意欲を目の当たりにした年でもあった。

海岸から照葉樹林



ガジュマルは岩上にも着生



アコウに絞殺されるタブノキ



熱帯らしいホルトノキ板根



アボガド類の代表タブノキ 伐採されたマテバシイの萌芽



ヤクシマサルスベリも萌芽



フカノキがカエデを絞める



オナガカエデの葉の変化



シマオオタニワタリ



大きなクワズイモ



シロダモの実はアボガド型



ハマヒサカキ鈴なり



炭焼き窯の跡



段々畑の跡



荒れる半山海岸





## 西部林道周辺の樹木チェックリスト

\* 01/11/1万吉～川原間で観察された種の出現頻度 \*<\*\*\*<\*\*\*\*

空欄は今回観察されなかったが西部林道周辺で分布が確認されている種

科名	種名	学名	出現頻度*	性質	備考
アオイ科	サキシマフヨウ	Hibiscus makinoi	*	落葉	
アオギリ科	アオギリ	Firmiana simplex	**	落葉	
アカネ科	クチナシ	Gardenia jasminoides	*		
アカネ科	カギカズラ	Uncaria rhynchophylla	**	つる	
アカネ科	シラタマカズラ	Psychotria serpens	***	つる	
アカネ科	ボチョウジ	Psychotria rubra	**		
アカネ科	ハナガサノキ	Morinda umbellata	**	つる	
イイギリ科	イイギリ	Idesia polycarpa	**	落葉	
イラクサ科	ハドノキ	Oreocnide pedunculata			
ウコギ科	フカノキ	Schefflera octophylla	**		
ウルシ科	ヌルデ	Rhus javanica		落葉	
ウルシ科	ハゼノキ	Rhus succedanea	**	落葉	
エゴノキ科	エゴノキ	Styrax japonica	*	落葉	
カエデ科	ヤクシマオナガカエデ	Acer morifolium	***	落葉	
カキノキ科	トキワガキ	Diospyros morrisiana			
カキノキ科	リュウキュウマメガキ	Diospyros japonica	**	落葉	
キョウチクトウ科	サカキカズラ	Anodendron affine	**	つる	
クスノキ科	クスノキ	Cinnamomum camphora	***		植栽?
クスノキ科	マルバニッケイ	Cinnamomum daphnoides			
クスノキ科	シロダモ	Neolitsea sericea	***		
クスノキ科	イヌガシ	Neolitsea aciculata			
クスノキ科	タブノキ	Machilus thunbergii	**		
クスノキ科	バリバリノキ	Litsea acuminata	***		
クスノキ科	ハマビワ	Litsea japonica			
クマツヅラ科	クサギ <small>アマクサギ</small>	Clerodendrum trichotomum	**	落葉	
クマツヅラ科	ハマクサギ	Premna microphylla	*	落葉	
クマツヅラ科	オオムラサキシキブ	Callicarpa japonica	**	落葉	
クマツヅラ科	トサムラサキ	Callicarpa shikokiana	**	落葉	
グミ科	ツルグミ	Elaeagnus glabra		つる	
クワ科	アコウ	Ficus superba var. japonica	**		
クワ科	イヌビワ	Ficus erecta	***		
クワ科	オオイタビ	Ficus pumila	**	つる	
クワ科	イタビカズラ	Ficus nipponica	**	つる	
クワ科	ヒメイタビ	Ficus thunbergii	***	つる	
クワ科	ガジュマル	Ficus microcarpa			
コショウ科	フウトウカズラ	Piper kadzura		つる	
ジンチョウゲ科	シマサクラガンピ	Diplomorpha yakushimensis	*	落葉	
スイカズラ科	サンゴジュ	Viburnum odoratissimum	*		
スイカズラ科	ハマニンドウ	Lonicera affinis	**	つる	
スギ科	スギ	Cryptomeria japonica	*		植栽
センダン科	センダン	Melia azedarach	***	落葉	
センリョウ科	センリョウ	Sarcandra glabra	**		
ツツジ科	サクラツツジ	Rhododendron tashiroi	***		
ツツジ科	シャシャンボ	Vaccinium bracteatum	**		
ツツラフジ科	ハスノハカズラ	Stephania japonica	***	つる	
ツバキ科	サザンカ	Camellia sasanqua	***		
ツバキ科	ハマヒサカキ	Eurya emarginata	***		
ツバキ科	サカキ	Cleyera japonica	*		
ツバキ科	ヒサカキ	Eurya japonica	***		
ツバキ科	モッコク	Ternstroemia gymnanthera	*		
ツバキ科	リンゴツバキ	Camellia japonica var. macrocarpa	**		



科名	種名	学名	出現頻度	性質	備考
ツバキ科	ヒメシャラ	<i>Stewartia monadelph</i>	*	落葉	
トウダイグサ科	アカメガシワ	<i>Mallotus japonicus</i>	***	落葉	
トウダイグサ科	アブラギリ	<i>Aleurites cordata</i>	***	落葉	
トウダイグサ科	シナアブラギリ	<i>Aleurites fordii</i>		落葉	植栽?
トウダイグサ科	カンコノキ	<i>Glochidion obovatum</i>	***	落葉	
トウダイグサ科	カキバカンコノキ	<i>Glochidion zeylanicum</i>		落葉	
トベラ科	トベラ	<i>Pittosporum tobira</i>			
ニレ科	ウラジロエノキ	<i>Trema orientalis</i>			
ハイノキ科	クロキ	<i>Symplocos lucida</i>	**		
ハイノキ科	クロバイ	<i>Symplocos prunifolia</i>	**		
ハイノキ科	ミミズバイ	<i>Symplocos glauca</i>			
バラ科	ヤマザクラ	<i>Prunus jamasakura</i>		落葉	
バラ科	バクチノキ	<i>Prunus zippeliana</i>			
バラ科	シャリンバイ	<i>Rhaphiolepis indica var.umbellata</i>	**		
バラ科	ホウロクイチゴ	<i>Rubus sieboldii</i>	***		
バラ科	リュウキュウイチゴ	<i>Rubus grayanus</i>	***		
バラ科	オオバライチゴ	<i>Rubus croceacanthus</i>	*		
バラ科	ヤクシマキイチゴ	<i>Rubus yakumontanus</i>			雑種?
フウチョウソウ科	ギョボク	<i>Crataeva religiosa</i>		落葉	
フジウツギ科	ウラジロフジウツギ	<i>Buddleja curviflora f.venenifera</i>	**		
ブドウ科	エビヅル	<i>Vitis thunbergii</i>		落葉	
ブドウ科	ノブドウ	<i>Ampelopsis brevipedunculata</i>	**	落葉	
ブドウ科	ツタ	<i>Parthenocissus tricuspidata</i>	**	落葉	
ブナ科	ウラジロガシ	<i>Quercus salicina</i>	**		
ブナ科	ケウバメガシ	<i>Quercus phillyraeoides</i>	*		
ブナ科	スダジイ	<i>Castanopsis sieboldii</i>	**		
ブナ科	マテバシイ	<i>Lithocarpus edulis</i>	***		
ブナ科	クリ	<i>Castanea crenata</i>			植栽?
ホルトノキ科	コバンモチ	<i>Elaeocarpus japonicus</i>	***		
ホルトノキ科	ホルトノキ	<i>Elaeocarpus sylvestris</i>	***		
マキ科	ナギ	<i>Podocarpus nagi</i>			
マタタビ科	シマサルナシ	<i>Actinidia rufa</i>	**	つる	
マツ科	クロマツ	<i>Pinus thunbergii</i>	**		
マツ科	ヤクタネゴヨウ	<i>Pinus armandii</i>	*		
マンサク科	イスノキ	<i>Distylium racemosum</i>			
ミカン科	カラスザンショウ	<i>Zanthoxylum alianthoides</i>	***	落葉	
ミカン科	ハマセンダン	<i>Euodia meliifolia</i>	**	落葉	
ミカン科	タチバナ	<i>Citrus tachibana</i>	*		
ミズキ科	クマノミズキ	<i>Swida macrophylla</i>	**	落葉	
ミソハギ科	ヤクシマサルスベリ	<i>Lagerstroemia subcostata var.fauriei</i>	**	落葉	
ミツバウツギ科	ゴンズイ	<i>Euscaphis japonica</i>	**	落葉	
モチノキ科	クロガネモチ	<i>Ilex rotunda</i>	**		
ヤドリギ科	オオバヤドリギ	<i>Scurrula yadoriki</i>	**		
ヤブコウジ科	シマイズセンリョウ	<i>Maesa tenera</i>	***		
ヤブコウジ科	タイミンタチバナ	<i>Myrsine seguinii</i>	**		
ヤブコウジ科	モクタチバナ	<i>Ardisia sieboldii</i>	**		
ヤマモガシ科	ヤマモガシ	<i>Helicia cochinchinensis</i>			
ヤマモモ科	ヤマモモ	<i>Myrica rubra</i>	**		
ユキノシタ科	ヤクシマアジサイ	<i>Hydrangea grosseserrata</i>	*	落葉	
ユズリハ科	ヒメユズリハ	<i>Daphniphyllum teijsmannii</i>	***		
ユリ科	ハマサルトリイバラ	<i>Smilax sebeana</i>	*	つる	

学名は基本的に「日本の野生植物」平凡社に拠る





ただそれだけなんだけど

「西部の夜をすごしたい」ただそれだけの理由だった。いつもツアーで行く西部の森は昼の顔。それじゃあ、一度は夜の顔も見たくない？気がつけば、思いつきオカダアイの悪い病気が蔓延。Y.N.A.Cのテッポウユリさなっちとガイド仲間のみきちゃんを巻きこんで、一夜限りの森林生活を決行した。

#### 西部照葉樹林

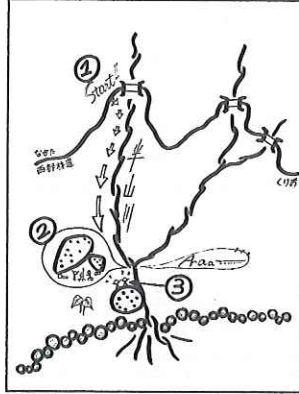
千メートル以上の山を45座抱える洋上アルプス屋久島は、その標高差ゆえに、小さな島の中に亜熱帯から亜寒帯までの気候(植生)が縦に凝縮された日本の縮図である。特に、西部一帯は島内で唯一その連続植生(垂直分布)が保たれている地域で、現在約20km無人地帯が続く西部林道も、その周りを覆う豊かな照葉樹林は、古来変わらず動物たちに恵みをもたらす野生の王国である。

#### 半山屋の顔

西部照葉樹林フォレストウォーク。西部林道道下半山川沿いのわずかな緩傾斜面、半山(はんやま)地区を、海に向かって下って行くY.N.A.Cの森歩きツアーである。今夜はこの半山川沿いの岩屋で夜を明かす。

山中もちろん道などない。豊かな照葉樹林の落ち葉を踏みしめ、次々に現れる大きなガジュマルや熱帯系の植物、そしてこの森に暮らすサルやシカたちのありのままの姿が次々に目を楽ませてくれる。また、昭和30年代まで戦後の開拓民が炭焼きや樟脳生産で生活していたこの地区には、今でも当時の森林生活を彷彿させる暮らしの痕跡が散在している。夜逃げ同然の無造作に放置されている食器や古めかしい瓶の山。炭焼き釜のレンガ状に焼けた土壁と、段段畑を仕切る精巧な石組み。人々の生活が非文明的だったかゆえに残った森の姿がここにある。

半山夜の顔—そのままに夕日 「日が暮れるのが早くなったなあ！」2001年11月8日午後5時、西部林道から半山川沿いの獣道を下る①。遠くで聞こえるシカの高く細い声が森の就寝時刻を告げるかのように響き渡り、いつも暗い照葉樹林の林床が木漏れ日で赤く染まり始めた。森が眠る前に我々も寝床を確保せねばならない。今日の寝床は半山川沿いの船首形通称タイタニック岩横、大岩屋②。準備が出来たら海辺の大岩展望所③へ直行。東シナ海に沈む最高の夕日をバックに口永良部島の輪郭がくっきり映る。早速乾杯！！



**大岩の星空** 木々の寝息が聞こえそうほど静かな夜。お腹一杯ご飯を食べて午後8時。今度は満天の星空を3人占めするべく、暗闇の中を再び大岩に向かう。歩きなれた道も、夜道となると鳥目以下、何も見えない。何とか勘を頼りに岩をよじもぼると…。うわあああ～。そこは360度天然プラネタリウム。とうとうと流れる巨大な天の川に言葉が出ない。今度は落差10mはあろう大岩の頂きで、微妙なバランスで寝そべってみる。目の前で天体観測板のようにほんの数十分の間に動いてゆく星、星。しし座流星群もなんのその。いつもこの空を見上げることができる屋久島はすごい！！ポロリッポロリッ・・目からウロコが落ちていた。  
**岩屋生活** 再び岩屋。屋久島の花崗岩は、山中に快適な空間(屋根)を多数作る。人はこれを岩屋と呼び、山仕事や猟の際キャンプサイトとして使っていた。人のみならず、今ここはもっぱら動物たちの雨宿りポイントで、糞だらけ?!の時も。今夜はそこへちょいお邪魔して一夜を過ごす。

今日の夕食は赤ワインベースの豪華洋風すき焼き。質素な暮らしまで再現しないまでも、こうやって闇と静寂に包まれながら火を囲む生活。星空の感動を着にまた飲み始めると、ついつい時間を忘れて話しに花が咲いた。こだまする雄鹿の高く遠く響く声は意外に近い。姿見ぬ眠らぬ動物たちを気配で感じ、壁の無いこの開放感がたまらなくいい。気がつけば0時をまわり、寝袋に潜りこむ。

明朝午前7時。白々と夜が明ける。残念ながらここは西側、朝日は拝めない。明け方ちょっと冷えたが、森の吐息で爽快に目覚めた。朝の空気はどこでも大体美味いが、人が住んでいない半山の空気は特にケガレを知らない。夜明けは、森が作るその日最初の空気を森の住人たちと分かち合う至福の時だ。

**森の生活を終えて** 人々は雨の夜も風の夜も、この森で非文明的な暮らしを送ってきた。でも、何も無いから見える星と、向かえる朝がある。お気楽だが、私の「森の生活」の素直な感想である。失ってしまったら、甦らないものに気付くいい機会かもしれない。

朝食を済ませたらいきなり水遊び。岩屋の近くにいいガジュマルターザンローブがある。皆11月にして水没・ずぶぬれ・腹ごなし。みきちゃんの勇姿は超素敵(右写真)。めでたく半山の24時間を終了した。





# 山好きのたわごと ～楽しい山小屋の夜

鷲尾紀子

私は人様に自慢できる様な登山経験が特にあるわけでもない。けれども、「山が好きだー！」とは、はっきりと自信をもって言える。こんな私がこの間、秋晴れの中、ツアーで宮之浦岳縦走登山に行った。本当に気持ちの良い天気で、宮之浦岳山頂からは地球が丸いのが良く分かる水平線を望み、お客様と共にとても充実した一日を過ごしたのである。その日の宿泊先は山の中。一日で山を降りなくても良い。これはもう、むふふなヨロコビなのだ。次の日もまだ山を楽しめるのだと思うと、まったく幸せだなーとニヤリとしてしまう。野グソだって楽しめちゃうんだ。(注：Y通13号参照)

今回は1泊2日だということもあり、市川氏は夜は豪華に行こうと決めずき焼きの材料と三岳をバックバックにしっかりとつめ、屋久島にある山小屋の中でも大きくて新しい新高塚小屋へと下って行った。すき焼き作りの代わりに市川氏と多少のずれがあったものの、お客様と楽しくごはんを食べ、そして三岳を酌み交わす夜がはじまったのだが、どうも小屋の中が妙に静かなのだ。どうやら周りの方々は厳かに食事をすませ、早々にひっそりと眠りに入っている様なのである。さあ、宴会だと意気込んでいた我々も必然的に声のトーンを最小にするのだが、廊下の向こうに、なんだかこの雰囲気気がつかないカップルがいる。二人で仲良くそれはそれは楽しそうに食後のお喋りをしているのである。あきらかに二人の声はでかすぎた。市川氏が「来るぞ。」と囁いて間もなく、「うるさいっ!!」とおばさまの怒りに満ちた一声。そしてそれに続いて「黙れ!」、「周りのことも考えろ!」と声が飛んでくる。「すみません。」と小さくなる二人。きまず〜い空気が小屋の中に流れる。やはり人様の眠りを妨げる様な迷惑行為をしてはいけない。修学旅行中なら外に出て正座もんだ。彼らがお叱りを受けるのはまあ当然のこと…だがちょっと待てよ。まだ時刻は夜7時だ。「えっ!?!」と何度も時計を見たがやっぱり19:00であった。

その瞬間、私はものすご〜く彼らに同情してしまった。だって、夜7時って普通はまだ寝る時間ではないんだもの。怒られてしまったカップルも「えっ、まだ7時…」とぼやきながらも声を絞るのであるが、やっぱりおしゃべりは楽しい。時々話しが盛り上がるあまり、声を押さえきれなくなる。私達だって、市川氏のくだらない影絵に声を出さずに笑うのは相当苦しかった。二度目のおしかりが飛んでくる。「外で話したらどうだ!」とかなりの立腹ぶりが声から伝わってくる。私はなんだかショックであった。なぜならこの怒っている方々、同じ時に山頂で喜びを分かち合った人々なのだ。山頂ではお互い最高の笑顔であいさつを交わしたはずなのに、今はまるで別人である。一体どーなっているのだ。どーして彼らはそんなに怒るのだ?そして、なぜ7時に寝るのか?そん

なに早い時間に寝ようとするからかえって寝つけずイライラしてしまうのでは?そもそも山小屋の消灯っていったい何時なんだー!???

私が初めて屋久島の山を登ったのは、Y N A Cに研修生として入る前。別に呼ばれた訳でもないのに勝手にY N A Cへ面接に出向いてしまった時である。実はこの時が私の山小屋デビューであった。淀川小屋はとても賑やかであった。みんなまだ明るいうちからと外で料理を作って、お互いのつまみを交換しながらいろんな話をしたのである。おじ様方から彼らがまだ学生だった頃の山登りの話を興味深そうに聞くワンダーホーゲル部の学生達の姿もあった。ここでは山小屋という場所が人と人を繋ぐ出会いの場となっていたのである。そして、夜がどつぷりと更けるまでみんな思い思いに過ごしたのである。この時点で私の中での山小屋は「楽しい場所。」としっかりインプットされてしまった。

そう!!山小屋はみんなにとって「楽しい場所。」のはずなのだ。別に「お喋り=楽しい」と言っているわけではない。いろんな人が集まる山小屋だからこそ、いろんな楽しみ方があるのは当然のことである。大切なのは、お互いが楽しく快適な夜を過ごせる様に気を配る事ではないだろうか。

我々が新高塚小屋に泊まった次の日は、あのしし座流星群が屋久島でもとてもキレイに見えた。聞くところによるとその夜、あの小屋ではみんなで夜中に起き出して、夜空を楽しんだそうである。山の中で見る流星群はさぞかし美しかったことだろうし、その感動を山小屋に泊まる全員で共有する!なんだかいいなーと思いませんか?

私は楽しいこと大好き人間だ。そして、楽しむための個人的なこだわりとして、このたわごとを書かせて頂いた。だって、ただ寝るだけの山小屋なんてほんと、つまないんだもん。



石塚小屋で楽しく飲む



# 自然クラブ2001レポート

持原 道子

写真キャプション協力:  
日高実穂



栗生歩道の風望岩から、  
にんまり笑顔で下降中の  
太志さん。

山・海・川も渓谷も、島のみんなで遊んでしまえと昨年からは始めた自然クラブ。今年も楽しくやっておりますので、その活動を報告します。

初っ端 1月に予定していた破沙岳登山を都合により中止したため、そのまま2月に持ち越し。破沙岳は、平内にそびえる1259mの岩峰。

「とにかくキツイ」の一言に尽きてしまった。」

とおっしゃった福島さん、それはあなただけではありません。

「前方にそそり立つ破沙岳が出現。“えっ！これに登るの!?”と見上げる態勢でしばらく目がテン状態。雨が本降りになり、想像以上の傾斜を登り続け、やっとの思いで頂上到達。ぼろ雑巾のように疲れ果ててしまった。」

ヒドイとかキツイとか皆さんごんつぶやいていましたね。登山口から山頂までの標高差は970mもあったのです。しかし、彼女は言っています。

「私には翌日からまる1週間、壮絶な筋肉痛のおまけがついてきた。そんなこんなで、もうコリゴリだなーなんて思っていたが、筋肉痛もおさまり、時間が経つにしたがって、今度はどの山に登るのかな？なんて考えた。」

そうそう、また山行きましょう。  
(2月18日 参加者23名)

翌3月、昨年好評だった西部の海岸古道を予定していましたが、天候に不安があり尾之間の鈴川の滝へ行き先を変更。ちょっと歩いて滝に着き、沢の巨岩にぼこぼこ乗っかり、のどかに弁当食べました。  
(3月18日 参加者25名)

新緑4月は楠川前岳登山。

「楠川地区で生活している私にとって



チョーしんどかったこの破沙岳。笑顔の裏には「この道戻るの?」「ここから飛び降りて帰るわー。」いろいろな思惑が隠れています。

は、朝・夕見かけるなじみのある山。今度こそは、なんとしてでも登頂するぞ」

2月の破沙岳登山で途中リタイヤしてしまった橘園さんは、こんな強い決意のもとでの参加でした。

「道なき道を行く山道、先頭の小原さんを頼りについていきましたが、ちゃんと地図と方位磁石が使えないと山は危険だということに改めて学びました。

いよいよ頂上という手前で、思いもかけない光景を目にすることができました。なかなかお目にかかることのできなかった屋久島のシンボル…あの宮之浦岳を見ることができたのです。あまりのうれしさに疲れもぶっ飛んで、思わずカメラでパチリ。今回は見事に登頂を達成することができましたが、宮之浦岳を見てしまった私は、この次は…と大きな野望を抱いたのでありました。」

彼女は転動されたのですが、その前に見事野望を果たされたそうです。

(4月15日 参加者18名)

5月、ニガノの浦で浜でばい。

「湯泊のとある道端に車を止め、それぞれの思いと重い食料を持って歩くこと数分。そこは河原みたいで広々とした浜辺。」

イソモン取り2回経験の伊東由佳さん、「すごい自信でいきこんでいたのに、収穫は2コ。でもみなさんの収穫は大漁だー。網の上には魅力がいっぱい、ぜい沢な気分でもおなかも満腹でした。」

よっぱらってふらついているお姉さんもありましたっけ。

「洞窟めぐりもスリル満点、トムソーヤの大冒険を思い出し、またこっそり行ってみたい所となりました。」

(5月20日 参加者24名)

\*浜でばい・浜へ出て、海の幸を捕って飲み食いすること  
\*イソモン・磯のもの、貝のこと



石塚山頂上にて

雨の6月になぜ石塚山登山? いやいや、木々の潤うこの季節は花々が開く季節。昨年11月に参ったこの山で拾った、見かけぬ落ち葉。あれはオオヤマレンゲにちがいない、きっと花はこの頃だ!とねらって行ってみました。

「梅雨の中休み天候は快晴、川筋には朱に染める見事なサツキ、道筋にはサクラツツジ、ハイノキ、フタリシズカなどの花、大きな猿の腰掛が数個も付着したツガの大木、屋久島を代表するヤクシマヤクナゲの花びらを踏み、木々の垣間よりみられるピンクのつぼみに感動しながら登っていると、頂上付近に霧島でも数カ所しか自生していないといわれるオオヤマレンゲの花を一輪見つけたのです。その白いかれんな姿に入ってしまったみたいです。」

と外山巴子さん。美しい花見登山ができましたね。

(6月17日 参加者23名)

いよいよ夏。暑いときは体を冷やせとばかりに、この月から水遊びが続きます。

まず7月は、元浦スノーケリング。

「幾多の魚が泳いでいるところを見ることが出来て感動しております。

お屋のバーベキューでは、飲んだり食べたり、おしゃべりしたり、それにおいしい鹿肉を頂けて幸せな気分を味わえました。」とご満足な波多野さん。遊んだら飲むのです、食うのです。

(7月8日 参加者14名)

そしていよいよ沢登り。

「超大型の台風が来たので一つて言ってる



ニガノの浜で獲れた海の幸を料理する人々。

池: あーっ、これってお鍋の蓋溶けないの?

小: おいしい誰だ? こんな置き方したの? 溶けちゃうぞ。

わ: すみませーん。大丈夫だと思っただけです。

岡: 大丈夫ですよ。

浜: わーい、ウイナー焼ける。これ、いただき!





のに、ほんまに行くの???

と思いながらも8月参加した日高実保さん。雨こそ降っていないがすごい風に迎えられ、鈴川予定を栗生川に変更。

「ホルンフェルスという岩でできている川なので、巨岩がつるつる滑り、そこを滑り落ちる水とともに、自然のウォータースライダー。岩を攀じ登り、滝壺にジャンプ。慣れとはすごいもので、高さが高ければ高いほどわくわくするんですわ。」

なんて、笑って快調かと思いきや、『うわー水増えてきたで。』『川岸に上がれ!!!』滝の水しぶきがもうもうと上がってきているではありませんか。見る見るうちに水位が上がリ、5分もたたないうちに1mは水面が上がリみんなびっくり。これを鉄砲水と言わずしてナンと言う!自然をなめたらいかん、とつくづく感じたのでした。」

(8月19日 参加者12名)

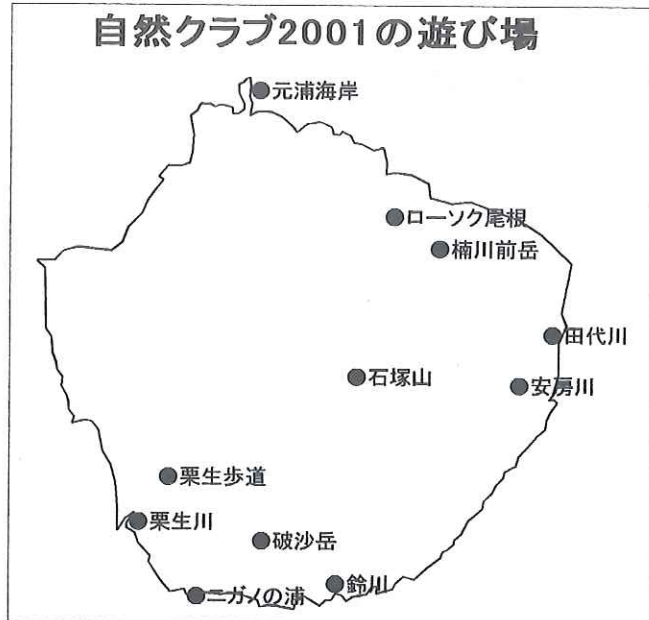
「今日の注意事項はひとつ! けっして『冷たい』という言葉を使わないこと!」田代川での半日駆け抜け沢下りはこうして始まった。いつもより楽な沢を想像していた新城さん...

「冷たい沢の水に足先の感覚が鈍くなってくる。みんなの腰に着けたハーネスの『カチャ、カチャ』という音が沢に響く。進むうちに沼のような水たまりの真上に到着。みんなためらいもなくドンドン飛び込むのがたくましい! 川の様子は最初そんなに速くはないように見えたが滝の音が近づくと流れる速さもスピードを増して行く。『このまま行って大丈夫かいな!』『ゴー』っという滝の音...ハーネスを着けたのも初めてなので懸垂下降と言われても、腕にばかり力が入ってうまくロープ操作ができない。『足を突っ張るようにして! 右手だけでロープを操作して!』のアドバイスが聞こえたので腕の力を抜いてうまくバランスをとるとそんなに力が要らないことを実感! そうなると意外に恐怖心よりも好奇心の方が先立つからおもしろい。まさに『ファイト! 一発!!!』の世界なのだ。

奥深い色の滝壺に落ちると、寒さと色合いのせいで浮いているだけで足が滝の下に引っ張られて落ちて行きそうな気分になる。

流れがゆるやかになってきたので、逆さまに浮いて川に流されながら空を見上げると川と自分が同化していく感じが気持ちいい! 『死んだら三途の川を渡るというが、こうやって流されていく人もいるのだろうか? 三途の川もこんなに綺麗なのだろうか?』そんなくだらないことを自問自答するうちに、一瞬にして視界が広がり海が見えたときには、川から海に続くのって意外にこういう視点でみたことなかった

## 自然クラブ2001の遊び場



ので妙に新鮮な感じがした。海から流れてくる風は肌寒く秋の気配を感じずにはいられなかった。」

(9月30日 参加者9名)

「屋久島にきてからずっとカヌーに乗りたかった! と思っていた。特に今年になってその思いは永田岳のごとく高まり、マイ・カヌー購入計画まで立てたほどだ。」とおっしゃる堤さん、さてさて安房川リバーカヤックのお手並み拝見...

「一通りの説明を受け、いよいよ自分の艇に乗り込んだ。『ん? なんか思っていたのと違うぞ』と思いながらまるで風呂桶に乗っている気分さえしながら、習ったとおり(のつもり)にパドルを動かしてみた。一応進むのだが、なんかおかしい。『まったく気持ちよく漕げない...』どうしても左側に回り出すのである。やっと到着した中州では宴会がたけなわ。市川さんからは『カヌーは宴会をするためにあるのです!!!』というありがたいお言葉をいただいた。」

飲んでばかり。いいのです。「他の参加者の何十倍もカヤックの醍醐味を味わい、たくさん進んだようで実はわずかな距離しか進んでいないという、まるで私の人生のようなものではないかと悟りつつ、初のリバーカヤック体験は終わった。この後、カヤック購入欲が宮之浦岳のごとく高まったのは言うまでもないでしょう。」

困難を知ってこそ高まる意欲、カヤックのご相談いつでも承ります。

(10月28日 参加者13名)



田代川の滝を下降中の小原さんを、私たちヒョッコは、心臓が飛び出そうなくらいビビリながら見つめていたのでした。

快適山歩き的气候の11月は、読図講座からスタート。登山にかかせないものを知っていても、地図とはなんぞや? というのが多くの方の本音でしょう。2回の机上講座をふまえて栗生歩道を歩きました。

「今回の山行の前には読図の勉強をしたつもりでしたが、老化現象のおきつつある堅い頭では理解していないようで、又基本からやり直して行こうと思っています。」とおっしゃる宮田のぶ子さん。この日は抜けるような快晴。

「一歩一歩ふみしめる大地、木々も冬支度を始めていました。木の葉の紅色、黄色... 秋だな。焼芋ができるかな。七五岳の勇姿を眺めながらいつか行くからねと心にいらい聞かせ帰路につきました。」

(11月18日 参加者13名)

12月は宮之浦の裏山、照葉樹林に包まれたローソク尾根の古い炭焼き道をたどりました。粘土で固められた炭焼き釜跡や、じくじくと斜面を登っていく道に、重い炭俵を背負ったであろう当時は思ひながらも、われらの荷物は食料ひとすじ。頂上ではビールに焼酎、ジンギスカンと胃袋を一杯満足させ下山しました。

(12月16日 参加者22名)

地図に落として見ると、なかなかあちこち行きました。フィールドでの遊び方も、どんな時期に何が面白いのかも、随分わかってきたと思います。それを深めるも広げるも会員方々次第でしょうか。今度はどこへ行きましようかね。



「ほれほれここでコンパスあわせて...」栗生歩道で読図をする。



## Calendar

2001年

- 7~9月 鷺尾「山のトイレさわやか運動」水質調査に参加。縄文杉登山道沿線の水場の調査を実施。
- 7/8 第6回 自然クラブ 元浦スノーケリング
- 8/19 第7回 自然クラブ 粟生川沢登り
- 8/25~29 明星学園研修修学旅行受入
- 9/14~16 松本 エコツーリズム推進協議会主催 国際エコツーリズム大会2001in 福島 パネリスト
- 9/16~17 市川 第1回雲仙エコツアーカレッジ講師
- 9/19 松本 EXPO なんでもアリーナ 月いちフォーラム 講演「屋久島こみるエコツーリズム」：名古屋
- 9/19~24 浜崎 JUDF のダイビングインストラクター講習に参加
- 9/20 松本 コンコルドアートギャラリー スライド映画会 屋久島の自然：名古屋
- 9/27 環境省中央環境審議会自然公園部会現地視察のガイド
- 9/30 第8回 自然クラブ 田代川沢下り
- 10/11~14 宮内庁生物学研究所ハゼ調査に協力
- 10/19~20 松本 環境省主催 トキを軸にした島づくり パネリスト：佐渡
- 10/21・22 JICA 自然公園の管理・運営と利用(エコツアー)研修の受入(ベトナムより参加者)
- 10/27 松本 「奥大井・南アルプスマウンテンパーク構想 エコツーリズム研究会」講師：静岡
- 10/28 第9回 自然クラブ 安房川リバーカヤック
- 11/1 ガイ選協フィールド清掃に参加(山の神祭り)
- 11/3・4 小原 海外遊行同人総会参加：白山
- 11/9~11 浜崎 スキューバC級指導員文部省認定試験合格、JUDFダイビングインストラクターの資格を獲得
- 11/13 長崎県上五島広域観光協会エコツアー視察受入
- 11/16・17 福井県海浜自然センターエコツアー研修受入
- 11/18 第10回 自然クラブ 粟生歩道
- 12/5・6 三島高校環境コース研修修学旅行受入
- 12/16 第11回 自然クラブ ローソク尾根ハイキング
- 12/31 年越し益救神太鼓に岡田・鷺尾デビュー

## Library

執筆記事

- ★ひかりのあめふるしま屋久島 田口ランディ (冬舎文庫) の解説  
今年の秋は、YNAC のツアーをランディ本読者が常巻。ブーム恐るべし。文庫本の解説を M 氏こと松本が担当。本の解説と言うよりも松本の半生を綴ったという感じ。これだけでも必読か?!
- ★日本アウトドアネットワーク機関紙「空へ」12回連載(松本)
- 第30号 巻頭言 屋久島の四季 夏編 2001/9/30
- 第31号 巻頭言 屋久島の四季 冬編 2001/12/31

## Contents

親父の死に様	1
フナムシーちょっと気になる海辺の生活者	2
となりの馬毛島	4
栗生ダイビングコースガイド	6
西部林道の樹木	8
森が眠る時間～照葉樹林の夜	12
山好きのたわごと～楽しい山小屋の夜	13
自然クラブ2001レポート	14

掲載記事

★「ココカラ」(日経WOMAN10月号別冊)

屋久島特集にYNACが紹介されています。そしてなんと研修生の分際でわっしーも登場。エコツアーについての取材を受ける松本氏の横をにかにかと笑いながら通り過ぎる姿になんだかパワーがあったらしく、取材を受けることに。屋久島を住む場所を選んだ女性(おおうっ!)として掲載されています。

## 編集後記

- 戦争の二十世紀が終わり、平和の二十一世紀をといわれていたのに早々に戦争が始まってしまった。そのおかげで屋久島はテロ景気、喜んでいいのやら!? 困ったものです。(ま)
- 3年目の屋久島も終わろうとしています。はたして4年目はわかる年となるのか。素直二年をとるゾ!(さ)
- いつまでも暖かい日が続くもんだとぼんやりしてたら、一気に寒さが奪われました。謹賀新年(も)
- 今年も残すところ後わずか。里帰りなどで島を留守にし、そして再び島に帰って来る度「ただいま」と呟く。ホッと心が軽む。故郷ま一つに限らなくても良いですよ? 私は屋久島のことをどんどん好きになっている様です。(ひ)
- まだまだこれから。勉強も、やりたいことも盛り沢山。あいつづらずのワー全快で、楽しくがんばりませー。(わ)
- 昨年は「愛子」が一躍脚光を浴びた。今年は(も)オカダ「愛」はブレイクし続ける…。身体をブレイクしないように。また楽しい1年でありますように。(あ)
- 振り返ると昨年に引き続き、やっぱり重苦しい2001年でした。今年ではあらためて全ての人々が平和に暮らすことを願わざるを得ません。新しい年が皆にとって素晴らしい年となりますように。(い)

## YNAC通信(ワイナックつうしん) 第14号

発行日：2002年1月1日

発行：(有)屋久島野外活動総合センター

住所：〒891-4205 鹿児島県熊毛郡上屋久町宮之浦368-21

TEL 09974-2-0944 FAX 09974-2-0945

E-mail: forest@ynac.com Url: http://www.ynac.com/